

# レネ王と昭和天皇

## ガンの告知について

2022/10/21



### 昭和が終わった日

先日のゴルフで疲れたまま、今日は終日、なんだか元気が出ず、コーヒーを飲んだり、坊っちゃん団子を食べたり、果物を食べたり、TVでアメリカの大リーグを観ながらなるべく勉強をしないようにしていました。なんたる偶然か、たまたまチャンネル・サーフィングしていたら、NHKのアナザーストーリー「昭和が終わった日 — 昭和天皇崩御を描く」に出会いました。少し気になったので、つづけてみていたら、ドンピシャリ、勘が当たって「ガン告知」の話になりました。それも天皇の「ガン告知」です。

## NHKの特別講座《イオランタ》

実は、今週の土曜日10月29日(土)はNHKの特別講座の日で、その日、チャイコフスキーが書いた最後のオペラ《イオランタ》全1幕だけを観ます。原作はアンデルセンになっています。

物語はこうです — 「昔、プロヴァンスの王さまレネは、生まれたばかりの娘の王女イオランタが、目が見えないことに気がつきます。娘の不遇に心を痛めたレネ王は娘を悲しませないために、娘の不幸を一生隠しおおうと、人里離れた高山の上に堅固なお城を築いてだれも入れないようにして、王女をかくまいます」。

さて、娘の不幸を一生隠しおおうとするレネ王の親心は、果たして本人のためになるのでしょうか？ これは、例えば、身内の者のガンの告知の是非にもつながる話です。

## ガンの告知

昭和62年9月22日、陛下は腸の通過障害を取り除くためのバイパス手術を受けられました。ガンでした。天皇の病気で宮内庁がとった処置は、レネ王と同じでした。天皇がガンであることは、本人をはじめ、日本人全体にも知らせたくないものでした。陛下の病名診断の発表は、病理学が専門の森巨東大学長や医学部病理学教室の浦野順文(うらのよしのり)教授が極秘の検討会で決めました。その翌日、高木侍医長は、「組織病変に細胞の異形成[ガンのこと]は認められなかった」と発表しました。これは「従来ストーリー」。



## 真実は必ず明らかに

浦野教授は複雑な思いでした。「真実は必ず明らかにされなければならない。後日であってもだ」。当時の浦野教授自身も、肝臓がんに侵され、告知されていました。彼は、NHKの担当記者からの執拗な問いに対して、「天皇の死後に発表する」という条件で天皇の病気について正直に述べた映像を残しました。これが、「アナザー・ストーリー」です。浦野教授は、昭和63年1月15日に55歳の若さでなくなりました。陛下に先立つこと約1年でした。録画は約束通り、天皇の死後、NHKのTVで発表されました。

## イオランタの眼の手術

さて、歌劇《イオランタ》ですが、レネ王は有名なムーア人の名医エブン＝ハキアを招いて娘の目を治してもらいたいと頼みます。エブン＝ハキアは、「イオランタの眼は手術で身体的には治せるが、王妃自からが、盲目の世界から目の見える世界へ移ることを心から願っているかどうかによって決まる。この世は心と身体が相互に依存するので、精神的に備えがなされたときにのみ肉体の治療が有効になるのだ」といいます。レネ王には確信がありません。王妃が目にしたこの世の現実が果たして彼女が望むものであるのかどうか、王には自信が持てないのです。王は治療を拒否します。

そこへ、幼い頃からの許婚であったロベルト公爵が友人のヴォデモン伯爵を連れて宮殿にやってきます。ロベルト公爵は、マチルダ伯爵令嬢が好きになったのでイオランタとの婚約破棄を告げに来たのです。ヴォデモン伯爵は、美しいイオランタを一目見てたちまち恋に落ちます。ヴォデモンがイオランタが盲目であることを知らずに話かけるので、イオランタは自分が目が見えないことに気がつきます。それを知ったレネ王は決意します — 「自分が盲目であることをイオランタが知った今ならば治療が成功するかもしれない」。そこで、一計を案じます。

## イオランタが「自分の世界」を選ぶ

王はヴォデモンが、勝手に王妃イオランタに話しかけ、真実を明かしたことに激怒して死刑を申し渡します。そして、イオランタに、「もし医者の施術でも視力の回復が叶わなかった場合はヴォデモンは死ぬことになる」と伝えます。このことは、彼女がこの世で生きたいかどうかを問うことになります。ヴォデモンを一目見たい一心で、王妃が目が見えることを願うように仕向けたのです。イオランタは治療に同意して、エブン＝ハキアと共に治療に向かいます。王はヴォデモンに、「イオランタのために一芝居打ったのだ」と謝ります。エブン＝ハキアとイオランタが戻ってきます。治療は成功して、イオランタの目は見えるようになりました。イオランタは、ヴォデモンの男らしさと魔法のような世界の美しさを目(ま)の当たりを見て、幸せを感じました。レネ王をはじめ、宮殿中が喜びに包まれて物語は終わります。

愛する人が出来たイオランタは、「この世を観たい」と自らが治療を選びました。イオランタの選択は正解でした。イオランタの眼には、世界も、人々も、

美しかったのです。昭和天皇の崩御のころは、いまと違って、まだまだ、ガンは不治の病でした。ガンの告知は、死刑の宣告と同じでした。いつの世でも、愛する者、大切な者をもった人々の迷いと悩みは尽きません。

### 告知なしの戦争

この「告知」は、ガンなどの病気の場合だけではなく、色々な場面でも考えられます。いま、中東では、二つの国が戦争を闘っている真っ最中です。戦争をするときには、お互いに、相手国に対して「宣戦布告」(declaration of war) をすることになっています。でも、宣戦布告は、戦争をする相手国に対してだけではなく、もう一つ重要なのは、自国の国民に対しても「宣戦布告」を宣言しなければならないことです。「我が国はいま、他国と戦争状態に入った」と「告知」(announcement, notificatio) して、戦闘の覚悟をさせなければならないのです。国には、「主権」というものがあります。「主権」の中には、「戦争をする権利」も含まれます。それで、憲法を決めるときには、「主権はどこにあるか」が、いつも、問題になるのです。今回の中東での戦争は、徴兵される国民に、「告知」がなされないままでおこなわれました。「主権」は、国民ではなく、独裁者に帰っていたのです。

【都築正道】